

# 『壁を壊す』

最終回  
「エピローグ」

中村圭介  
東京大学社会科学研究所教授

『壁を壊す』の連載も最後となった。今回は非正規労働者の組織化について、最近、私が考えていることを述べてみたい。

## 企業別組合の功罪

日本の労働組合の基本は企業別組合である。ある企業に勤める労働者から構成される労働組合である。

企業別組合には長所もあれば短所もある。できることもあればできないこともある。両面を持つのはどんな組織であっても、どんな人間であつても同じである。

長所は、たとえば企業内で生じる労使関係上の課題を解決したり、経営参加を進めることが容易であることが挙げられる。他方、短所としては、企業の外への関心が弱かったり、企業の内であっても正規労働者以外への配慮がやや欠けていたりすることなどがある。

私は短所を批判、非難しようとも

思わないし、「できないこと」をやるときだと主張するつもりもない。ただ、短所をカバーでき、そしてそれが決して「できないこと」ではないのなら、やってみる価値はあると思うのだ。

## 大きなチャンス

いま、企業別組合は自らを大きく変えるビッグ・チャンスを目の前にしていると思う。非正規労働者が増え、集团的発言メカニズムが十分に機能しなくなり、代表性が揺らいでいる。この危機を乗り越えるためには自らのために非正規の組織化に踏み出す必要がある。

ユニオン・リーダーにはぜひ、この二つの危機を察知してほしい。非正規労働者を仲間に加えなければ、自分たちが危ういのだ。非正規の組織化に成功すれば危機が去るだけではない。企業別組合が抱える短所の一つ——正規労働者以外

# リーダーは危機を察知し、非正規の組織化に踏み出すべき

非正規労働者を仲間に加えなければ、自分たちが危うい——。それは「できないこと」ではない。いま企業別組合は自らを大きく変えるビッグ・チャンスを目の前にしている。



なかむら・けいすけ  
雇用職業総合研究所研究員、武蔵大学経済学部助教授などを経て、現職。主な著書に『衰退か再生か：労働組合活性化への道』（共編、勁草書房、2005年）、『成果主義の真実』（東洋経済新報社、2006年）など多数。



## 『まったくもっ!!』作・まるおかななめ

先の通常国会で継続審議となり、秋の臨時国会で大きなテーマとなりそうなる労働者派遣法。政権交代後に大きく改正内容が前進したこともあり、今回の参院選の結果を受けて、その行方に注目が集まる。参院選で躍進したみんなの党は、小泉路線を引き継ぐ小さな政府を主唱。派遣法に関しても規制緩和を唱えている。

差があることが問題だと考えているわけではない。仕事内容、キャリアの見通し、責任と権限に違いがあるのであれば、差が存在するのは当然のことだろう。

いったいどの程度の違いであれば公正、公平だと言えるのか、これを議論してほしいのである。公正、公平といつても、何らかの基準が天から降ってくることも、マーケットが決めてくれるなどとも思っていない。ましてや学者や法律が決めるものだとも思っていない。

当事者たち、つまり正規労働者と非正規労働者が自分たちの間にある「違い」が公正、公平であると納得すれば、それでよいのではないか。お互いが話し合い、しつこくであれば、その程度の違いはあつてもしょうがないとお互いが認め合う。さしあたりはそれで十分ではないのか。そう私は思うのである。

これまでは非正規労働者に発言の機会が十分には与えられていなかった。仲間になれば違う。議論するチャンスができる。企業別組合にとって、さらに大きな一歩に踏み出すことになる。

## 地域を繋ぐ

実は、企業の外への関心が弱いというもう一つの短所をカバーできるチャンスも眼前にある。労働組合必携シリーズ第二弾『地域を繋ぐ』がそれを明らかにしている。